

株式会社中西武道具



思い入れのある
古い武具だからこそ
職人の技を結集して
修理し元通りに

代表取締役社長
中西悠貴さん



修理の職人を抱えている店は、
他にはない。
自社で職人がいることで、
細かい要望にも応えられます。

武道を尊ぶ気持ちからか、古い武具を修理して使いたいという要望が多いんです。うちは、この道何十年というベテランの修理職人を抱えているので、できる限りのお声に対応します。以前、師範が使用されていた何十年も前の武具を直してほしいとご要望がありました。甲手に使われている鹿革や鹿の毛も虫がわいたり、破れていたりと損傷がはげしい状態。それでも、大切に使用してこられ、これからも使いたいというお気持ちに応えたいとお受けいたしました。現在では同じような材料を入手することも難しい中、ルートを頼り、なんとか元通りに修理することができ、お客さまにも大変喜んでいただけました。今後はネットに力を入れ、武具の販売と並行して修理にも広く応えたいと思っています。

武具の販売と修理対応に加え 帯を使った竹刀袋を制作販売

社名のとおり、中西武道具は剣道など武道の道具を製造・販売する会社。昭和9年に創業した当時は、陸軍に柔道着を納入していたそう。戦後はGHQの指令で、柔道から剣道へと事業を転換した。現在も剣道の武具が中心で、ネットでは柔道や居合道、合気道の販売も行っている。

剣道の武具は面、甲手（こて）、胴、垂（たれ）の4点が基本。かつて、同社はそれらの製造から販売まで行っていたが、現在は製造を外注先に委託し、販売を行っている。というのも、武具を制作できる職人が高齢かつ人数も少なく、純粋に国内で制作すると販売価格が数百万円、さらに2年待ちといった状態に。そこで同社は製造を外部に委託することで、単価を安定させるとともに納品までの期間短縮も実現している。ただし、武具は単価が高く、ものを大事に使う考えから修理ニーズは大きい。そこで、修理については自社に職人を抱え、些細な要望にも応えている。

製品の主な販売先は、各地の警察署や学校など。一般企業とは違い、いずれも簡単に取引ができるわけではない。それまでの実績や信頼感があってこそだと言える。また、剣道に携わる人数は減りつつあるという厳しい状況の中、売り上げが変わらないことが、同社の技術力の高さを証明している。

5年前から同社は竹刀袋の自社内での制作を始めた。竹刀袋に活用したのは、着物の帯。竹刀袋は1社1強で、値段もその企業の言い値で高め。そこに勝負を挑むには、アイデアが必要だと考えていた時、和柄が武具に合い、丈夫で、竹刀の長さに対応できる生地長さなど帯のリサイクルを思いついた。何より、剣道の防具は色使いがなく、他の人と違うものへのニーズは高いはずだと確信。その狙いどおり、お世話になった方へのお礼、昇段のお祝いや大会の優勝記念など、帯を使った竹刀袋のニーズは拡大している。

武道をたしなむ人口は減少し、加えて少子化も進む中、同社にとっては厳しい状況は今後も続く。しかし、昭和初期から武具に携わってきた高い技術力を持つからこそ、同社を信頼し、頼りにしている剣士たちは多いだろう。

株式会社中西武道具

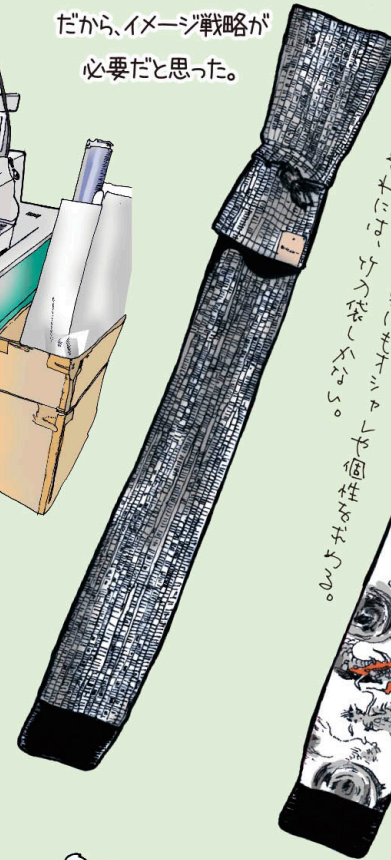
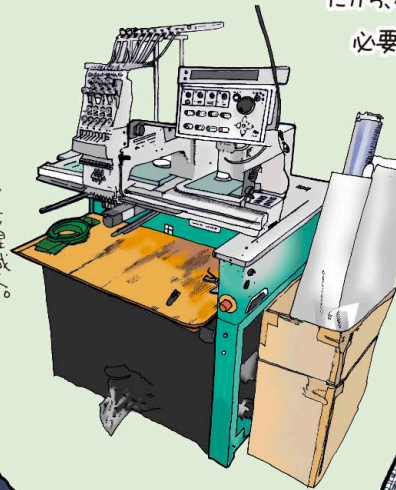
<http://www.kendougu.co.jp/>
〒544-0021 大阪市生野区勝山南1-2-3
TEL 06-6731-4900 FAX 06-6718-1031

事業内容／剣道、柔道、合気道など武道具の製造卸売業

竹刀袋は、大きさ機能も、どこが作っても同じ。

だから、イメージ戦略が
必要だと思った。

従来の竹刀袋は、10人、20人、30人が修理職人。
スベテ、パートスタッフが担当。



この竹刀袋は、昔の職人が手作業で作っていた。今では機械で作るようになった。でも、昔の職人が手作業で作っていた。今では機械で作るようになった。

出稽古の時など、コンパニオンの上のものを保持している。
帯の竹刀袋は、そんな要望に合致する。



武具の修理職人は70代、
竹刀袋の制作職人は50代。
伝統ある職人の技術が、
現代の技術と合わさって、
新しい技術が生まれる。

帯で竹刀袋を作る場合、
裏側生地の縫い目がほぐれてしまうもの。
裏生地の強度を確認したり、
何より、帯目さばりのデザインに合ったものがないかを
考えるのが難しい。

籠手の手の甲に入っている
フツシヨンは元来「鹿の毛」が
使われていた。

今ではとても貴重なもので
なかなか手に入らない。



剣道着は、
藍染め刺子生地という
日本独自の生地を使用。
最近では合成繊維の
品質が高まり、
刺子生地のような
凹凸感も
表現できるようになった。

有名タレントに 武具を提供!

我が社の
自慢

これまで、何度も在版の情報番組
で紹介されてきた同社。ある在版
テレビ局の依頼で、若手男性アイドルがTVドラマ
で着用される防具を提供したこともあるそう。